



TITLE:

紅朮（くれなゐもゆる） 6号

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会国内向け広報誌編集専門部会

CITATION:

京都大学広報委員会国内向け広報誌編集専門部会. 紅朮（くれなゐもゆる） 6号. 紅朮（くれなゐもゆる） : 京都大学広報誌 2004, 6

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196789>

RIGHT:

紅 鰯

くれなゐもゆる

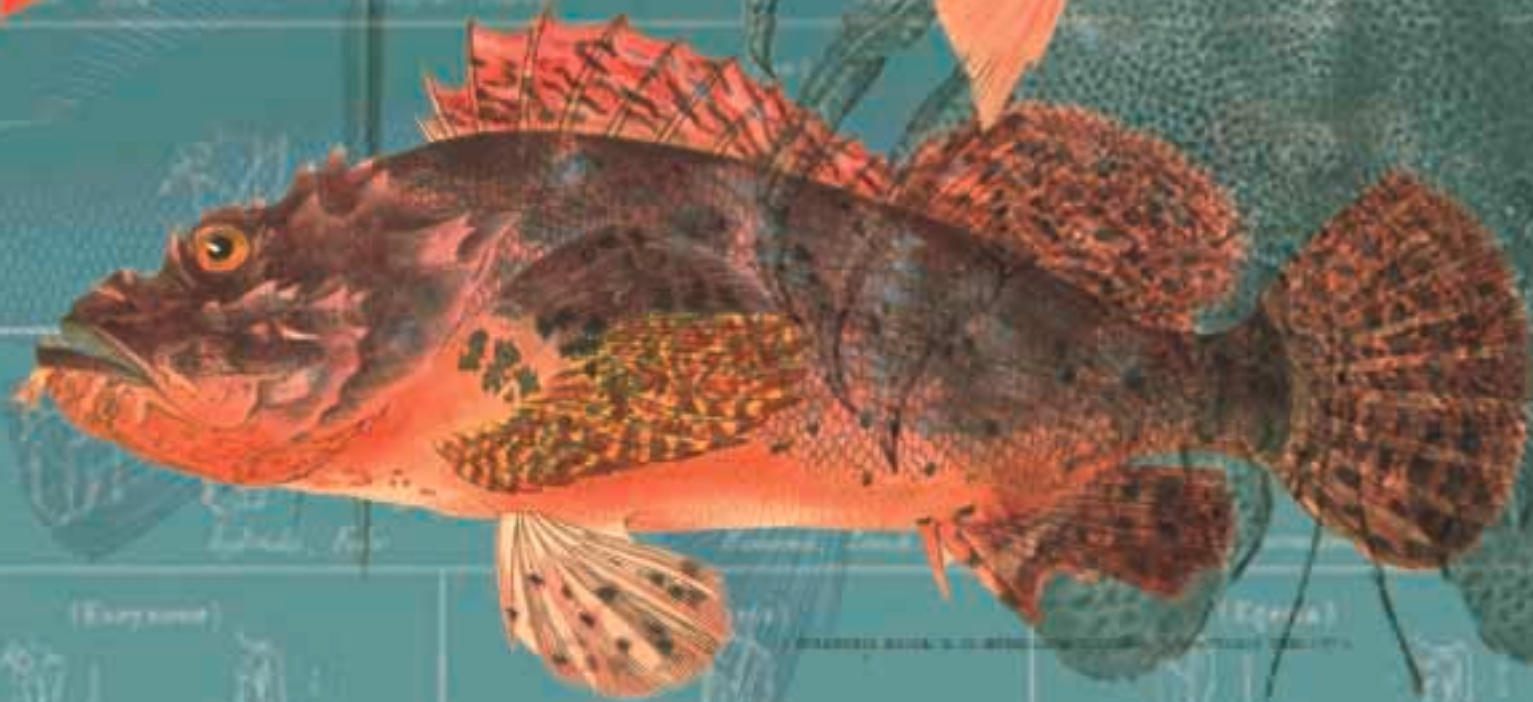
KYOTO
UNIVERSITY
MAGAZINE

第6号

京都大学広報誌



SERRANUS OCULATUS.



巻頭 鼎談

ゲスト

金剛永謹

（こんごうひさのり）

金剛育子

（こんごういくこ）

京都府教育委員会委員

ホスト

金田章裕

（きんだあきひろ）

京都大学副学長

能楽のシテ（主役）方の五流派で唯一、

京都に家元をおく金剛流は、

鎌倉時代の猿楽（申楽）・坂戸座を源流とする。

芸と学、それぞれにおける継承・教育・創造を視野に、

歴史を刻み続ける京都という都市と大学を語る。

三段帆掛文唐織 写真・金剛流宗家

金田 金剛さんご夫妻は、ご子息の教育は、能が嫌いになつてもらつたら困るから、はじめのうちはあまりやかましく言わないように心がけておられるとか。稽古の方法などは、能の長い歴史の中でどのようにできあがつていったのでしょうか。

金剛永謹 世阿弥の『風姿花伝』で、年齢に沿った稽古法が書いてあるので、一番難しいのは思春期だと思っています。

能だけではなく、一般に芸事は早く

からやることに意味があるようです。数えの六歳の六月からと言いますが、僕も一番最初の稽古のことは記憶にありません。ですからきつと、一種の刷り込み、気がついたときには、当たり前のようにやっているという環境です。

能楽師の家以外の人は、かつては中学を卒業したら書生として住み込みをして、夜間高校に通いながら稽古をしたものですが、現在は大学を卒業してから入ってくる。しかしながら、型は若いうちに習得しないと、能向きの体に



KYOTO UNIVERSITY MAGAZINE
京都大学広報誌 ●第6号
2004年9月

表表紙 理学部動物学教室所蔵のシーボルト『日本動物誌』（1833～50年に分冊刊行）は、彼が採集した動物標本や川原慶賀など日本人絵師が描いた下絵をもとに、オランダのライデン博物館の3人の研究者によって編集された。鳥類、魚類、甲殻類、哺乳類・爬虫類（合冊）の全4冊からなる。手前が魚類で、上はハチジョウアカムツ（*Serranus oculatus*）、下はオニカサゴ（*Scorpaena cirrhosa*）、背景は甲殻類、右がコブセミエビ（*Scyllarus haanii*, Von Siebold）、左がカブトガニ（*Limulus longispina*, Van der Hoeven）。この4種をコンピュータ処理によって合成した

裏表紙 京都大学の動き

巻頭鼎談

① 歴史を刻み続ける都市と共に歩む

ゲスト—金剛永謹、金剛育子

ホスト—金田章裕

⑦ 心の中の京都大学

和牛の改良は全体主義で

片岡文洋

培われた記者魂

木須井麻子

⑨ 研究の最前線から

現代日本政治の分析

大嶽秀夫

⑬ これ——そ、なむ、や、か、こそ——学問

巨大魚メコンオオナマズの
行動と生態を探る

荒井修亮

⑰ 京都大学をささえる人々 熊崎清則

⑱ 輝きは躍動から 村上幸弘、土山貴子

⑲ 京都大学再発見ツアー

旧農学部附属演習林本部事務局

新たな哲学を育む場

⑳ 附属図書館のモノ

旭江文庫と大賀壽吉

ダンテ研究への多大な貢献

赤井規晃



歴史を刻み続ける都市と共に歩む

なりませんし、声もそのようになっていく、やはりなるべく早い時期から稽古をするのが理想ですね。

うちの息子（十六歳）の場合は、そろそろ舞台で能面をつけるころです。元服すると初面^{はつおもて}があります。

金田 大学ですと、一人の教授が何人も学生を同時に教えて、その中から一人二人すばらしいのができてくれたらいいという意識があるのですが、宗家になると、直系がきちんと育たないといけないわけですから、たいへんですね。

金剛 私もいろいろな人を教えます。自分の息子を教え、プロの子どもを教え、外から入って玄人になる人を教え、さらに素人さん、という感じです。うちの流儀の米国人のリベッカ・ティール（小鴨梨辺華）さんは日本で初めての、外国人のプロです。

金田 能曲は全体でどのくらいになるのでしょうか。

金剛 できた曲数は何千とありますが、今演じている曲は二百ぐらいです。

金田 新曲もあるのでしょうかね。

金剛 新曲もありますし、捨ててしまった曲を復曲するというものもあります。何か面白いのがないかと、現在はほと

んどやっていない古い曲を探したりしています。

もつとも、二百曲を全部やっていくわけではありません。よく演じられているのは百曲ぐらいでしょうか。あとの百は舞台にそうでません。

金田 その百曲をマスタートする順番とこのはあるものですか。

金剛 あります。特殊なものがあつて、六十歳を越さないとやらないものもあります。老女ものと言いますが、百歳ぐらいの小野小町なんかでてくる能です。その手の曲が五曲あります。

今はもう守られてはいないのですが、本当は舞い尽くさず、あの世で舞うための曲を一曲残すのです。老後の初心と言う。この初心は「新鮮な」という意味ではなくて、「へたくそだったとき」という意味の初心です。高齢になつても芸道というのは完成しませんから、最後まで不完全なままで終わる。だから最後まで稽古を続けて、一曲残して死んでいく。金田 画竜点睛は死んでからということになりますね。

金剛 はい。何を残すかというときに、老女ものの中の一曲を残す。ただ、世阿弥が書いた稽古法は五十歳で終わつ

ています。人生五十年の時代の話ですから。

まず型を習得し、その上でより深い精神的な探究に向かう

金剛 技術の習得は早い段階でします。完成はしませんが、基本的なものが身につくのは二十歳ごろでしょうか。声をつくりあげるのもうちよつとかかりますが。そのあたりでやるのが『道成寺』で、能では卒業論文とよばれています。狂言では『釣狐』がそれにあたります。もちろんそのあと技術の習練は続きますけれども、今度は精神的な探究により深く向かうわけです。

金田 型を習得して、その上でそれに精神を込めるのですね。

金剛 六歳からやるのは能の世界に慣らすためであつて、技術の習得を本当に始めるのは中学、高校ぐらいからです。そこまでは舞台で遊ばせているようなものなんです。

金田 それまでは、遊べる場所があつていいという感じでしょう。

金剛 というか、幼いうちはごほうび目当てですね。舞台へれば何か買ってもらえると（笑）。舞台がいやになら



小鍛治 白頭。シテ、金剛永謹。
写真・金剛流宗家



ないようにというのは、子どものころから気をつけました。それと、反抗期は皆ぐずぐずしている。でも、小さいころからやらされていると、そこで離れる人は少ない。もう少しすると能が面白くなってきました。

謡いは一番最初は、口移しです。まだ本が読めませんから。要するにおうむ返しで覚えさせる。そうすると、全く意味をとり違えて覚えていたりしています。「ろくじにつくべきやうもなし」という文句が『船弁慶』にあり、ろくじは「陸路」と書きます。陸へはこの船はつけないということを言っているのですが、「六時になってもこの船はつかない」と思っていました（笑）。

編集部 奥様は府の教育委員をやっておられるので、おうちでなさっている伝統的な世界と、両方ごらんになつていかがですか。

金剛育子 学校では、ともすると大学受験を人生の一つの終着点のように錯覚してしまう親や子供が多いのですが、

能のような伝統的な世界は、三歳頃から稽古を始めて、五十代でも涙垂れと言われ、七十年代八十代に向けて徐々に大成していくような息の長い世界です。その意味で、さまざまな可能性を秘めた子供の一生をじっくりと長い目で見据える教育の視点が、大切ではないかと感じます。

編集部 「型」が終わったあとの「心」は、どのようにして始まるのですか。

金剛 やっている曲目自体が、そういう種類になつてきます。

金田 心が入らないと理解できない、表現できないのでしょうかね。

金剛 四十ぐらいになつてきますと、そういうのを手がけるようになります。若いときに舞つてもしょうがないような曲もあります。稽古は一応やりますけれども、それはあとで舞うための予行演習みたいなものです。

世阿弥は割合と具体的な発言をした人で、能楽師がやつてはいけない三大戒律があり、大酒飲みはいけない。博打をしたらいけない。それから女狂いをしたらいけない。

金田 大学でもそのまま通用する（笑）。

完全体を嫌う 日本文化の美意識

金田 金剛さんのところはシテ（主役）の宗家ですが、ワキとか鼓とかそういう方々との連携は、日頃からあるのでしょうか。

金剛 昔はワキ、囃子、狂言も含んだ一座でした。それが明治維新までは続いたんです。幕府の式楽だった能は、明治維新によつてその庇護を失い、座を維持できないので解体して、各流派でやるようになりました。

やつぱり昔の座付きで長い間いっしょにいた流派とが一番よく合います。今は、他の座に属していた方ともやりますが、台本が違います。観世座にいたワキと、宝生座、金剛座のシテでは、それぞれの台本を使いますので、演能の前に打ち合わせをしないと、ちぐはぐになります。

金田 しかし、打ち合わせで揃うところが見事です。我々の大学だと、学部が違うとなかなか合わない（笑）。

京都には、能楽以外にも伝統的な芸能がいろいろあります。お花もそうですし、お茶もそうですが、能からすれば、そういうものの習得も、教育の中に入るのでしょか。

金剛 昔はもつと密接な関係がありました。能役者なのにお茶のほうが上手だったという人が桃山時代にいる。千家のご先祖になる宮王太夫という人です。

だから、もとをたどれば多分、足利將軍の同朋衆ということになるのでしょう。そのあとは一休さんを中心にした文化集団に結集していた。ですから、それぞれの芸術、芸能の基礎とするところは皆近い。似ている。「わび、さび」と言つてみたり、「幽玄」と言つてみたり。

金剛永謹さん



金剛育子さん

室町の同朋衆のつくった文化が日本文化なんです。それ以前の日本文化は少し違います。中国から入ってきた文化を日本風に変容させてはいますけれども。室町文化は日本人が、こんなのがいいじゃないかと考えてつくりあげた文化です。お花もお茶も能も、全部そこからでていますので、昔は非常に密接な関係を持っていたのです。しかし、だんだん分化して離れていって、今はお互いの交流もありません。

金田 私は歴史地理学という分野の研究をやっているんですが、近代化以前の町とか村の原型はやっぱり室町なんです。それぐらいで一度切れる。切れるというところですが、大きな変換期があります。極端に言えば、南北朝期ぐらいでがらつとかわります。

編集部 ところで、諸芸交流の話に戻りますが、またいつしよにやろうという流れができていますのでしようか。

金剛 そうです。日本文化離れがある

ので、皆で力をあわせてこれをくい止めようとする動きです。

金田 その場合に、理想として、意識される芸のきわみのようなものはあるのでしょうか。

金剛 室町文化というのは、やはり日本の風土にあったものではないでしょう。海外公演などから帰ってくると、日本は湿気が多いと思う（笑）。日本は湿度の高い美意識ですね。大陸の美意識とはちよつと合わないから、それで独自の文化をつくったのではないのでしょうか。室町文化には日本の四季がすごく影響しています。日本は春夏秋冬がはつきりしていますね。その中で花が咲き、散り、変化がけつこう大きい。そこで、何が特徴になるかということ、完全ではなく、あからさまでないものに幽玄などの美意識を感じるということ。村田珠光が「月も雲間になきは嫌にて候」と言う。雲がかかっている満月はだめだと。

金田 日本の美意識というお話ですが、学問の世界でもそれに似た特徴があります。今日の学問の体系は、十九世紀の終りのヨーロッパでできあがりました。明治以後、日本でもそれを受容し、大学の研究・教育の基本となっていることは繰り返すまでもありませんし、各分野で世界的な最先進の研究が生まれていることも事実です。

しかし、一方で日本的な美意識や感覚、あるいは日本で培われてきた教養などにより強く根ざした研究が進み、世界的にも高く評価されている場合があります。文化的伝統の豊かな京都が基礎となつて、官学的でない学問を目標とした京都大学の設置によって花開いた、いわゆる京都学派がその例です。西田哲学がその典型とされますが、湯川先生の素粒子論なども東洋学の素養が大きく貢献しているという点で、京都的とされています。長い歴史を刻み続ける京都という環境の果たす役割が大きいと思います。

能面が舞台になじむまで およそ百年

金田 私のような素人からしますと、能の舞台はピーンとした緊張感がありまして、張りつめた糸の響きのようなものをビシビシ感じる。それがあるときは早かったり、あるときは遅かったりします。能はもともとゆつたりしたものが多かったんですか。

金剛 いや、早かったんです。能楽は散楽がもとで、これは曲芸だといわれています。宙返りだとか綱渡りだとか、そこから興っていますから。

能の場合は歌舞伎とは異なり、江戸時代、幕府の式楽になつて、新作をつくるのを禁止された。そうすると、持っている曲ばかりを研究することになります。もつと深く、もつと深くとなつていく。新しいものがどんどん入つてきたら、そのようなことはなかったでしょうが。これしかやったらいけないというたら、そこへ入り込んでいくから、やはり重くなつていくのでしょうか。

金田 そのかわり、うちに秘めたエネルギーというのはずごいものがあると思います。

金剛 そうですね。六百年近くそうだったんです。

金田 能は六百年以上の歴史の中で位置づけられていますが、私のところはせいぜい明治三十（一八九七）年以降です（笑）。

編集部 今、サイエンスは、特に先端のところで集中してなされますが、本当は学術史も研究しつつ、その長い歩みの中で、いま自分がどういう位置で学問をやっているかというのがわかるのが、創造的な仕事につながるのではないかと思うのですが。

金剛 能面は不思議なもので、新しくできたものが舞台の上でうまくなじむようになるには百年近くかかります。一

番いいのは六百年前とかいうことになりすから、長いですね。

編集部 十九世紀の中頃ぐらいまでは、本も古典がよいとされた。新しいものを引用してはだめだということでした。

が、現代は極端にかわりましたね。

金剛育子 私は能楽の世界にかかわるようになって、能面や能装束など、本当に古い、作られた時代もわからないものに日々接しています。そうしますと、今の一瞬だけではなく、宇宙の長い歩みの一齣をあずかせていただいて、また次の世代に送っていくのだ、という気持ちになってきます。現在は、長い時の流れの通過点にしかすぎない、という意識は、能楽にかかわっている人は皆持っていると思います。

連携とともに 「秘すれば花」

編集部 開かれた大学と言われますけれども、「開く」ということで京都を見ていると、上手に開いたり閉じたりされている所が多い。社会との交流といながらも、時々閉じたり（笑）。そういう知恵や仕組みは、大学がこれからもつと学べそうに思うのですが……。

金田 それが成熟した都市の大学のあり方の一つだと思います。

京都大学というのはこれまで無粋なところで、外部の人は構内に入りたくもないが、中に何があるのかなと、わずかに関心を持たれていた状態でした。

それではいけないというので、どなたにも入っていただけるレストランをつくりました。どうぞと言っているんだけど、「だれでも入っていいのですか」と聞く人がいます（笑）。

金剛育子 ホテルを思わせるような、すばらしいレストランですね。

金田 現段階で、我々自身が研究と教育の原点を見つめなおしていくためには、成熟した都市とのコンタクトがない



時計台の1階にあるレストラン「ラトゥール」

とだめだと思います。しかし、大学の中が町の大通りといっしょになっていいというものでもありませんので、その兼ね合いが難しいですね。

金剛 世阿弥は「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず」と言っている。一番大事なところだけは隠しておく。見せていいものはどんどん見せたらいいけれど、ある部分は秘密みたいなものが

あるのがミステリアスでいい（笑）。その兼ね合いがむずかしいかもしれません。

編集部 何を隠すかですね（笑）。

金剛育子 京都大学では、社会人入学など、いろいろな講座がありますね。

金田 大学のあり方自体、人数から予算の使い方から、全部文部科学省が指示していたこれまでとは違う状態になりました。若年層の教育の最終段階に大学がありますが、学校教育そのもののいろいろな問題をはらんでいて、最終段階だけではどうしようもならないという部分があります。できれば一生をトータルに見据えて、その中で、あせらず、必要なことをやっていくことができるような教育がある種の理想だと思えます。

少し人気とりのようなこともしながらやっていかないとけないというのが現状ですが、そういうときに、一番ありがたいのは、京都という成熟した都市の存在です。長いタイムスパンで生き続けてきた、能のような伝統的な芸能、それを支えてきた繊細な産業が渾然一体となった存在というのは非常に大きいですね。

また、京都では数は東京や大阪より少ないですが、新しい産業、京セラ、島津、任天堂などの企業が成長して、しかも本社を京都から動かさずにいる。そういうところに我々の大学もあるというのはいへん大事なこと、表面的ではない、社会とのきちつとした連携がないとだめなんです。

金剛 京都のいいところは、えらい学者さんにいろいろなことをすぐ聞けることだ、東京に本社を移したらそれができなくなる、と皆さんがおっしゃっている。

金田 適切なサイズの町の中にあるからいいのですね。

町の中の 入りやすい能楽堂

金剛育子 能は伝統芸能と言われ、とかく古くさいと思われがちですが、いかなる時代でも人間である限り、変わることはない喜びや悲しみなどの心の世界を追求していますので、これは人類の永遠のテーマですね。人の心の原点を見つめる姿勢こそクローズアップされてほしいと思います。

金剛 人間が生きている価値観が問題ですね。今の日本では宗教的なものが欠けてしまったのではないですか。

編集部 でも京都はそれを意識させますでしょう。何々教とかでなくても、大事にすべき石があつたり木がそびえていたり、川も汚すと罰があたるよという感覚で人が育つわけですから。何が大事かという感覚の植えつけが、京都の場合、小さいときからあつて、京都風のスタイルもあると思います。金剛さんのところでは、能楽堂にもつとたくさんの方がみえるように呼びかけをされているそうですが、それはどういう将来をイメージされて……。



↑金剛能楽堂は京都御所の西、烏丸通りに面してある
写真・金剛流宗家



◀現代の能舞台は能楽堂と呼ばれる。新金剛能楽堂は、2003年に完成、イヤホンガイドは6チャンネルあり、外国の人に好評。新しい照明設備の工夫により、同年社団法人照明学会から照明普及賞優秀施設賞を受けた
写真・金剛流宗家

後、お客様に外で大文字をみていただける。京都はそういうところがまたいいですね。

金田 この能楽堂は烏丸通に面しています。いろいろな方が通るという意味では、開放的でいい場所ですね。

金剛 文化的な雰囲気にも恵まれていますね。京都御所があり、自然との調和もありますし、近くにいろいろなお寺さんがあったり、また学校もたくさんありますし、美術や音楽の施設もあります。そういう点で、ここはいい場所ですね。

金田 金剛能楽堂のすぐ近くが一条通です。一条札ノ辻というのは、江戸時代の京都の中心です。だから江戸時代のはじめ頃は、いろいろなところへの距離は、一条札ノ辻からの距離が書いてある。のちに三条大橋からになりますが、その意味で、ここは伝統的な京都の中心です。

金剛 しかし劇場というのはなかなか規制が厳しい。文化的な雰囲気のある場所だからいいなと思つたら、ここは住宅地だからだめ、風致地区だからだめとか。基本的には劇場は、商業地域と工業地域以外に建てたらいけないと言われ、少しおかしいと思いました。

金田 法律が町並みをだめにしているところがあると思います。京都の町家がどんどんなくなっていくのも、同じ形の木造建築を同じようにつけれないからです。

金剛育子 移転前の旧能楽堂は木造でしたので、この能楽堂も木造にしたかったのですが、劇場なので、消防法で鉄筋コンクリートにしてくれと言われました。それとは別に京都ならではのいろいろな規制もあり、設計士の方はずいぶん苦勞されていました。

能楽堂の建築事業を振り返るにつけ、つくづく思いますことは、多くの皆様方の暖かい御支援あつたればこそ建てることができたということです。能を通じて少しでも社会に還元することこそ、この御恩に報いることと思っています。

金田 我々の大学は世界の調和ある発展に資する、という高邁な理想を掲げています。しかし現実には、世界レベルの競争にさらされ、能率を重視するアメリカ的なスタンダードに合わせる必要が高まってきた。ただ、それであってもなお京都に根ざしてやっています。そういう一所懸命の状況にあつて、なんとかしようと思つています。そういう意味でも、金剛さんが人間の本源のなところ根ざした芸術を継承して創造されているのは、我々にとってはいへん貴重なお手本です。

二〇〇四年九月十五日
京都市上京区の金剛能楽堂にて

函

館近くの駒ヶ岳山麓で、フランス産肉牛シャロレーを飼育している曾田シャロレー牧場のことを知った十七歳の夏、私は将来の夢を肉牛牧場経営に決めました。小学生の頃から動物の飼育、植物の栽培、家事が趣味でした。そのことを知っていた義姉が送ってきた婦人雑誌の写真記事が私の好奇心に火をつけ、牛を見たことはあっても、触ったこともない者が牧場経営をめざしたのです。

北大が志望でしたが旅費を捻出できない状態ではなく、受験は京大に決めました。入学してからは相撲部の活動とアルバイトで明け暮れ、教養部で三年を過ごしたのち、辛うじて農学部畜産教室に進むことができました。そこで、当時「和牛界の天皇」といわれた上坂章次先生に出会えたことが、私の人生を決定づけました。研究室の昼食会での和やかな雰囲気と笑顔は、天皇というよりは優しい父といった感じでした。一年の大半を全国の和牛生産地での指導と教育に従事されていたために、おのずとそういう空気が醸し出されてい

左から次男、笑っている愛牛「よしたけ」、筆者



和牛の改良は全体主義で 片岡文洋

「夢がいっぱい牧場」代表

は、家族がどれだけ勇気づけられたことでしょうか。上坂研究室の密なる人間関係の証であると思います。

上坂先生の教えを胸に

私は肉牛牧場を目指していましたから、仕入値の安い乳用牛の雄子牛肥育（食用にするための飼育）を主に、和牛の繁殖、肥育を従に経営していました。一九七七年には「大樹町和牛生産改良組合」を設立、上坂先生の紹介で畜産先進県・島根へ雄子牛の購入に行き、現在の「大樹和牛」づくりに貢献できたことも良き思い出です。

十年前に次男が「牧場を引き継ぎたい」と言い出しました。そのとき、次男の実習を引き受け、指導をしていたのは鹿児島島の徳重孝氏で、京大附属農場の技官をつとめられていたのが縁でした。徳重氏は現在の全国人気種雄牛ナンバーワンの「平茂勝」号を世に出された方で、大樹町へは好意的に精液を提供していただいています。

仲間達と二〇〇〇年に「大樹町産業クラスター研究会」をつくり、活発に

商品開発や販売を手がけています。全国発信しているホエー豚は、チーズをつくっている会員のホエー（乳清、牛乳からチーズができるときに残った水溶液）を豚にあたえたもので、脂肪と肉のおいしさは格別で、「十勝豚丼」の強力な助っ人となっています。

私は、海のギャングといわれる厄介者のヒトデの堆肥化に成功し、特殊肥料としての販売が目前です。牛糞と混合すると、毒素のアステロサポニンが分解され、亜鉛やカルシウムが豊富な肥料になります。栽培試験では好成績を出しています。

このように、会員みずからが頑張ることで研究会は活気づき、さらなる飛躍を目指しています。発足当時は町長に「道楽集団」といわれた研究会ですが、今ではTMO（Town Management Organization）事業でできた集積店舗の中に我々の商品コーナーがあり、町の活性化の一助になっていると自負しています。上坂先生の教えが自分の行動の底に流れている、との感慨に浸りつつ田舎生活を送っています。

■かたおか ふみひろ

- 1969年 京都大学農学部卒業
北海道広尾郡大樹町で実習に入る
- 1971年 現在地で畜産業開始
- 1992年 牛肉加工工場竣工、精肉等加工販売開始
- 1995年 ファーム・レストラン開業
- 1995年 有限会社「夢がいっぱい牧場」設立
- 2001年 ベトナム国立フエ大学農学部
に協力して、同学部に付属
農場建設
- 2004年 ヒトデの堆肥化に成功

●「夢がいっぱい牧場」ホームページ
<http://www.full-dreams.com>

昨年（二〇〇三年）九月、私は新聞記者として京都大学を担当することになりました。それまで滋賀県で四年半、警察や行政などの取材をしていましたが、京都への転勤に伴い、全国でも珍しい「大学担当記者」を経験したいと希望しました。今年四月の国立大学法人化、ロースクール開校など大学が転機を迎えた時期でもあり、やりがいを感じたからです。

一般には知られていませんが、京都大学には記者クラブがあります。そこには、同志社大学や立命館大学などさまざまな大学からも報道資料が送られ、記者会見も開かれています。ここを足がかりにしたり、自分でネタを見つけたりして記事を書いています。

七年ぶりに母校に通い始め、まず目についたのはキャンパスがきれいになったことです。正門横のカフェ「カンフオーラ」では学生や先生たちがお茶を飲んだり、パフェを食べたりして談笑しています。一般教養を学んだA号館も三、四年次を過ごした文学部も新し

培われた記者魂

木須井麻子

読売新聞記者

強い意志に感銘

くなりました。

建て替えラッシュの中でも、目玉は昨年十二月、約八十年ぶりに改装された大学の象徴・時計台。戦前の思想弾圧を象徴する「滝川事件」（一九三三年）や、一九六〇〜七〇年代の大学紛争で学生と総長の団体交渉の舞台になるなど歴史を見つめてきました。完工に向け、関係者の証言を盛り込んだ記事を書くことと取材をしました。

滝川事件で、法学部の滝川幸辰教授の免官処分抗議して辞職した元教官は、「先輩が築いてきた大学の自治が踏みじられた。激動の時代だった」と振り返り、時計台が全共闘に占拠された一九六九年の「京大闘争」を知る元教授は、「学生が、何のために学ぶのか大学に問いかけた時代。知的権力の象徴である時計台に立てこもることで変革の意志を示した」と語ってくれました。

九〇年代に学生時代を過ごした私にとって、歴史の重みを感じる取材でした。改装された時計台は、国際会議場やフランス料理店も備えた「新しい大学の顔」ですが、忘れてはならない歴史の記録もとどめています。展示室には、太平洋戦争末期、神風特攻隊員として戦死した学生が家族にあてた手紙があり、出撃の八日前、鹿屋基地で母親と再会した際の写真を、大学文書館が所蔵していることを知りました。芝生に座り、繕い物をする母と笑顔で語らう息子の姿に衝撃を受け、記事で紹介し



京都大学広報センターで取材中の筆者

たところ、戦争の過酷さを伝える写真として反響がありました。元総長室であった迎賓室には、改装前に飾られていた須田国太郎画伯の学徒出陣の絵が掛け替えずに残されています。法人化で改革を進める一方、伝統である「学問の自由」を守り続ける強い意志に感銘を受けました。

貴重な時間

このように、学生時代に知り得なかった歴史やさまざまな分野の最先端の研究、ユニークな研究者や大学の運営方針を定める幹部の方々を取材するのは、大変興味深い仕事です。記者として母校に通い、「知の宝庫」であると改めて認識しました。

そもそも京都大学文学部を目指したのは、読書が好きという単純な動機でした。島根県から出てきて一人暮らしをしたのは東山三条の下宿。風呂なし、台所、トイレ共同の長屋で、家賃は一万円台でした。京都大学の子学生四

人で暮らしており、一緒に料理を作り、夜は誰かの部屋に集まっておしゃべり。近くの商店街や銭湯の人たちとも顔なじみになりました。

サークル活動でバレーボールの練習をし、夏休みには京大生協に乳製品をおろしている鳥取県の牧場にアルバイトに行き、空き時間は図書館で本を読んでいた。勉強など何か一つに打ち込んだ学生生活ではありませんでしたが、将来を模索し、かけがえのない友人を得ることができた貴重な時間でした。

京都大学の学風は「自由」「放任」とも言われています。のんびりして就職準備をしなかった私は大学四年の時、受験したいいくつかのマスコミ採用試験では全滅。回り道をして三年後に読売新聞に入りました。誰かに指示されるのではなく、興味がある対象に近寄り、問題を発掘し、じっくり調べるという記者に必要な姿勢は、自主性を大切にしている京都大学にいたからこそ培われたと思います。

■きすい あさこ
1996年 京都大学文学部卒業
ニッセイコンピュータ入社
1997年 退社
1999年 読売新聞大阪本社入社
大津支局、同支局近江八幡通信部を経て、京都総局勤務

「風の都市」と呼ばれるシカゴの街。私が留学先に選んだのはシカゴ大学だった。あの悪名高いボス政治家、デイルー市長が君臨していた一九七〇年代

初めの頃である。まだこの歳になっても時に夢になって現れる広大なシカゴ大学のキャンパスは、スラム街に挟まれていて、治安も非常に悪い頃であった。しかも、それまで私が在籍していた東京大学大学院法学政治学研究科では、院生の身分で留学する者は皆無に等しかった。その上「留学とは見聞を広め、箔をつけるために行くのだから、やっぱりハーバード大学でしょう」というのが、その当時のアメリカ留学先の通念であった。三十年前の話である。

シカゴ大学に正規の大学院生として入学し、博士コースのカリキュラムに沿って勉強を始めた私は、アメリカ政治学の革新性と層の厚さに圧倒された。

現代日本政治の分析

研究の最前線から
法学研究科

大嶽秀夫

(法学研究科教授)



民主党の前原誠司衆議院議員(右)に取材する大嶽教授。前原代議士は京都大学法学部、故・高坂正堯ゼミで国際政治を専攻。松下政経塾8期生。卒業後、1991年に府政史上最年少の28歳で京都府議会議員に当選、93年に衆議院議員に当選し、現在3期目(京都2区)。大嶽教授の政治学は、こうした取材の上に成り立っている

なにして、私が後にしてきた当時の日本政治学界は、いまだ情報鎖国の状態にあり、研究というのは研究室に閉じこもって静かに外国の文献を読むというのが慣行であった。大学院のゼミや指導教官から指示される書物は、ほとんどが両大戦間に書かれた西ヨーロッパの古典であった。ミヘルススの「政党論」(一九二二)、マンハイムの「イデオロギーとユートピア」(一九二九)、カール・シュミットの「政治的なものの概念」(一九二七)などであり、それらが当時の院生にとつての必読文献であった。ときたまアメリカの最新の研究、いわゆる「行動論的」政治学の業績が紹介されることもあったが、それらは脈絡もなくバラバラに日本に漂流していたから、その意義を捉えるすべもなかったのである。大学紛争のあとの閉塞感も相まって、私は「日本の政治学のあるべきところ」に疑問を感じていた。お定まりのコースに沿って

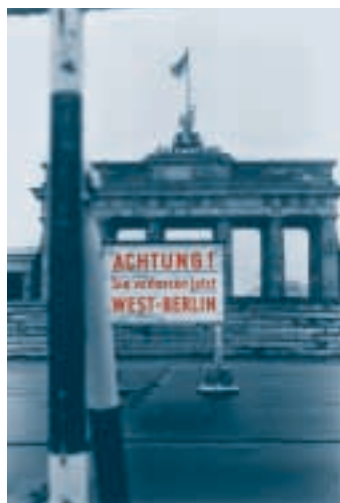
半分以上の注は外国語文献で埋め、そこそこの論文を提出して日本で職を得てから、それでは留学しようかなどという悠長な気分には到底なじめなかつたのである。

現状分析をアカデミックな研究とする

さて、シカゴ大学で、毎週三科目計六回の講義に出席し、毎回一、二冊の本を読んでくるよう指示され、教室ではもっぱらそれをもとに議論をするという、外国人学生にとつては極めてハードなスケジュールをこなす毎日が始まった。それでも、私は世界の最先端の学問に接しているのだという自負と興奮に駆られて、日夜奮闘した。

第二次世界大戦の後、政治学の中心は亡命ドイツ人を多数受け入れたアメリカに移り、五〇年代、六〇年代には世界各国からの頭脳流失・流入も続いて、アメリカの主要大学は社会科学のグローバルなセンターとなっていた。シカゴ大学も

- おおたけ ひでお
- 1966年 京都大学法学部卒業
- 1969年 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了
- 1970年 シカゴ大学大学院政治学部(〜73)
- 1977年 東京大学法学博士
- 1974年 専修大学法学部講師
- 1978年 東北大学法学部助教授
- 1983年 ハンブルク大学在外研究(〜85)
- 1985年 東北大学法学部教授
- 1992年 京都大学大学院法学研究科教授
- 1999年 バリ政治大学研究所在外研究(〜2000)
- 2001年 紫綬褒章受章



↑1968年、西ベルリン側から見たブランデンブルク門。この門は分断と統合の象徴であった。「注意！あなたは今、西ベルリンを離れようとしています」という警告看板は、今はない。1961年、東から西への脱出を防ぐために、東西ベルリンの43キロにわたって壁が構築されたが、1989年に開放された。大嶽教授の問題意識の一つに、保守本流像の解明がある。敗戦国西ドイツと日本の戦後処理を担い、さらに今日に至る両国の政治経済の枠組みを決定づけたアデナウアーと吉田茂の比較研究は、1983年から2年間にわたるドイツ滞在で深化した 写真・柴永文夫

その一つで、おそらく日本や中国を含む比較政治の分野では最先端の研究の中心であった。草木も靡くハーバード大学ではなくシカゴ大学を選んだのは、単に天邪鬼的な私の性格だけではなく、そういうことにも理由があったのである。さて、がむしやりに勉強に埋没していた私は、次第に大きなショックに對峙せざるを得ない羽目になった。「日本の政治学はアメリカの政治学からは少なくとも五十年は遅れている」という紛れもない実感だ。黄昏のミシガン湖を眺めながら、青白い顔で（大学とアパートを行き来するだけなので）呟いた私の声は一生忘れられないと、今でも妻が言う。三年間の留学生活で特に私の心に焼き付いたのは、政治学の第一線の研究というのは、インタビューや生の資料の収集であり、基本文献を読み終えた後は、研究室を出て、政治の「現場」に向かわなくてはならないということであった。

日本に戻った私は、博士論文の執筆に取りかかった。テーマは日本の政治における大企業の影響力についての実証研究である。「現代の日本政治を材料に博士論文など書けるのかね。外国のことか明治か大正をやった方がいいのではないか」とある教授からの親身になったのアドバイスがあったほど、学界の状況は渡米前と較べて変化がなかった。私の論文の完成は当初予定していたよりは随分と手間取ってしまった。帰国後、四年間の日時を必要としたのである。現代日本政治などを扱うのはジャーナリストの仕事であつて、アカデミックな研究ではない、という認識がまだ大手を振っていた時期でもあった。にもかかわらず、私のこの「無謀な」試みはようやく日本のアカデミズムに受け入れられることとなった。同じことは同時期に留学していた猪口孝氏の研究にもあてはまる。

一九七〇年代末から八〇年代初

頭にかけて、学界状況に転機がおとずれた。当時三十代後半の「若手」政治学者（猪口孝、村松岐夫、そして私など）がアメリカに留学して理論研究のトレーニングを受け、帰国後その理論モデルや研究手法を、修正を加えつつ日本政治に適用する作業を開始し、その成果をこの時期に公表し始めたのである。その数年後に創刊された『レヴァイアサン』（木鐸社）という学術誌の名から、この新しい「学派」は「レヴァイアサン・グループ」と呼ばれることとなった。

ミクロな政策決定過程からマクロな構造的理解へ

ところで、その当時は、依然、日本は特殊な国であり、外国の概念で日本政治を理解することはできないという議論が幅を利かせていた。こうした議論は、外国の研究者や外国で修行してきた研究者に門戸を閉ざす役割を果たしていた。しかし、自分の国は特殊な国であるという

考え方は、世界にかなり普遍的な現象ではないのかという素朴な疑問を、私はその当時から抱いていた。スイス、ソ連、中国、インド、シンガポール、そしてアメリカと思いつくままに挙げてみても、それらの国はすべて自分の国を特殊と思っている。日本が「特別に特殊な国」だという論説の根拠はどこにあるのだろうかという設問に、「日本特殊論」は説得的な答えを用意していなかった。

「日本特殊論」に対する疑問に答えるためには、日本政治だけを研究しているのでは解答が得られない。どこか外国を本格的に研究し、日本との体系的な比較をすることが必要である。しかもそのためには、ヘゲモニー国家たるアメリカ政治は特殊すぎる。そこで私は、四十歳未満という限界すれすれのところでフンボルト奨学金に応募し、運良く受け入れられて、ハンブルク大学に二年間（一九八三〜八五）留学することになった。ただ、私はドイツ留学で

（日本の多くのドイツ研究者とは違つて）ドイツの政治学を学ぼうという気持ちは全くなかった。同国の政治学の状況は日本と似たりよつたりで、アメリカに大きく水を開けられていたからである。私の研究は、例えばインドネシアに出かけていつて現地の新聞や雑誌、それに現地の学者の本を読むのに似ていた。ドイツ語もかつてのような学問上の言葉としてではなく、いわば現地語として（改めて）学んだのである。ドイツ人が聞いたら腹を立てたであろう態度であつた。

二年間のドイツ滞在中では、日本の社会民主党を念頭におきながらドイツ社会民主党を、吉田茂を念頭におきながらアデナウアーの政治指導を研究した。それは、日本が比較不能なほど特別に特殊な国ではない、ということを実証する作業でもあつた。帰国してこうしたテーマで、三冊の本と数本の論文を日本語や英語で執筆、公刊した。その過程で、当時



アデナウアーは1876年生まれ、1917年ケルン市長となるも、33年にナチスにその地位を追われた。1945年ケルン市長に復帰し、キリスト教民主同盟を創立、翌年には党首となった。ドイツ連邦共和国（西ドイツ）の発足とともに首相に就任、49年から63年まで首相をつとめた。西欧陣営の一員となり、力を養うことでドイツ統一を達成できる、という政策を実行、「奇蹟の復興」をなしとげた。その強力な指導力ゆえ、「宰相民主主義」「アデナウアー時代」と称された。第二次世界大戦後を代表する政治家として、TIMEの表紙に何度も登場した

西欧研究で目ざましく登場、発展していた制度史的な政治経済学に触れ、その成果を日独比較に導入することを試みた。ミクロな政策決定過程からマクロな構造的な理解へと関心の中心を移行させたのである。私の研究においては二度目の転機となった。

新自由主義の登場と挫折、ポピュリズムの登場と挫折

一九八五年にドイツ留学から帰国したとき、中曽根行革が終盤にさしかかっていた。二年前、ドイツに出かける直前には、この第二臨調による行政改革が大きいうねりとなることは予想できなかった。政治や行政のプロであればあるほど、第一臨調の惨めな結末が記憶にあるだけに、その予見は難しかったと言えよう。しかし、帰国直後の新鮮な目には、行革の意義が明瞭に姿を現した。それ以来二十年間、「新自由主義的改革」の試みが再三登場し、挫折していく様を見て、それぞれの改革のプロセスについて実証的なアプ



中曽根康弘首相、国鉄改革関連法案で橋本龍太郎運輸相（右）と打ち合わせ。1986年11月27日撮影。1987年4月に国鉄は分割・民営化された
提供・毎日新聞社

ローチで研究を積み上げながら、その政治的、歴史的意味を考え続けた。そのために、サッチャーのイギリス、レーガンのアメリカ、そしてミッテランのフランスの研究にも取り組んだ。世紀末における一年間のパリ留学も、そのためであった。

さて、私が行革に関して政治家や官僚、労組や企業のリーダーへのインタビューを続け、政治家の内幕本やジャーナリストによるルポルタージュを渉猟しているうちに、日本の政治には「政治改革」というもう一つの課題が登場した。細川内閣の誕生がそれである。しかも、そのスローガンを掲げた政治家が、ポピュリストとも呼ぶべき、大衆の圧倒的な（しかし短期間に消滅する）人気を背後に登場してくる現象がたびたび起こった。小泉・眞紀子旋風がその

最近の例である。新自由主義の登場と挫折、それとほぼバラレルなポピュリズムの登場と挫折という二つのサイクルの絡み合いこそが、現代日本政治を理解する鍵ではないか、という感触を得るに至ったのである。

日本では、ネオ・リベラル改革は、体系的理念をもった改革として認知されることは稀である。スキヤンダルを契機として、官僚への反発から行政改革が叫ばれ、政治家への嫌悪から政治改革が叫ばれるというのが、共通のパターンである。言い換えると、行政改革と政治改革とは、何よりもスキヤンダルへの処方箋であり、「小さい政府」、民営化、規制緩和などは、論壇の場合は別として、有権者レベルでは、すべて行政や政治の腐敗への対処であつて、それ以上のものとは捉えられてこなかったのである。したがつて、一九七〇年代半ばのロッキード事件の発生と新自由クラブの誕生以来の「改革のサイクル」は、スキヤンダルによって生まれ、それを梃子

2001年4月、小泉内閣が発足した。内閣支持率は80～90パーセントにのぼり、小泉首相の写真集が刊行され、キャラクターグッズが売れた。スタート時のキャッチフレーズは、「恐れず、ひるまず、とらわれず」「米百俵の精神」「聖域なき構造改革」「改革なくして成長なし」
提供・読売新聞社



とした支持調達以外の何ものでもなかった。将来の政治経済システムの全面的な見直しという（本来新自由主義改革がもつ）ヴィジョンを欠いているのである。日本で真に建設的改革的潮流が定着しない理由の一つがそこにある。

現在の研究課題は、小泉政治の比較政治学的分析

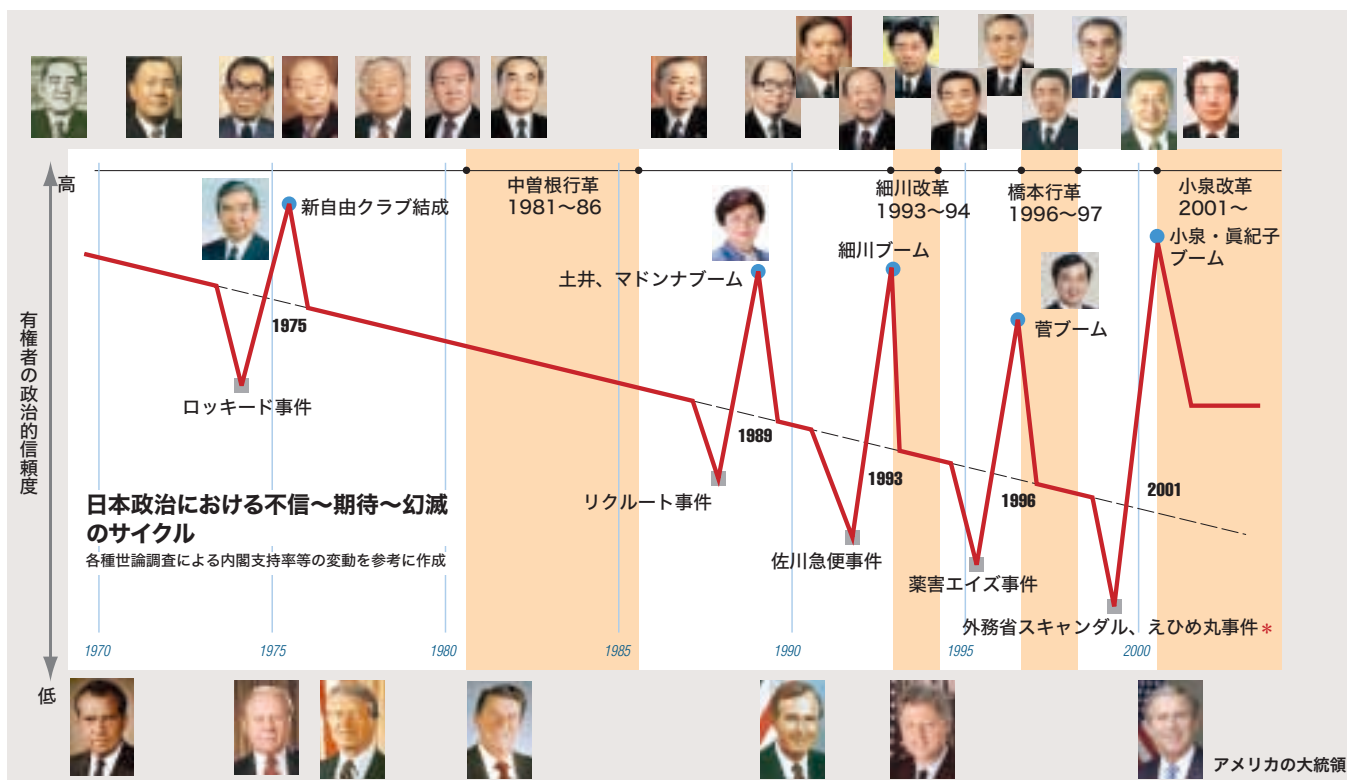
その観点から、中期的に日本政治の流れをつかむための大枠を図にしてみたのが、左の図である。左上から右下への斜線は、政治的信頼の低下を示している。「あなたは政治家を信頼していますか」という質問への回答によって測ったものである。森政権の時期には、「信頼する」という回答が八パーセントにまで下落した。スキヤンダルによる政治への不信とそれに続く特定政治家への

の期待の高まりを、図では谷と山の急激な角度をもつ斜線で表現している。細川内閣の支持率は七〇パーセント台に、小泉内閣のそれは八〇パーセント台にも達している。しかし、これも一、二年の内に急速に収束している。そして次のスキヤンダルが、同様のサイクルを作りだすというわけである。ただ、図にも示したように、小泉内閣は例外的に比較的長い期間、相対的に高い支持率を維持してきた。その秘密はどこにあるのか。小泉内閣の掲げている新自由主義的改革（郵政や道路事業の民営化、公共事業の削減による「小さい政府」）は、中曽根行革、橋本行革の再現であるが、小泉内閣の支持調達の上でどのような役割を果たしているのか。

そうした観点から現在、小泉

改革」の政策過程とその背後にある権力過程について、実証的研究に取り組んでいる。俗な表現でいえば、「改革勢力と抵抗勢力」の綱引きとして表現された政治ドラマを政治学的にどう解釈するかという研究に従事しているのである。そのために、同じ、市場経済化戦略の中で利権政治に対するポピュリスト的改革を試みている韓国、台湾、さらにはロシアの政治指導者を比較の対象として選び、数名の政治学者を組織して、国際的なポピュリズムの比較分析のプロジェクトを立ち上げた。

以上の研究戦略は、複雑な利害対立、権力闘争の背後に、理念の対立、具体的には新自由主義と社会民主主義との対立、ポピュリズムと（現実的な利害調整としての）「利益民主主義」の理念的対立を見ていくことにある。したがって、政治哲学的考察による理念の探求と、理念の背後にある「構造」の理解、すなわち構造主義的なイデオロギー分析が研究の一つの柱をなす。最近



*2001年1月、機密費をめぐる外務省問題に森政権は厳しく対応しなかった。2月、アメリカの原子力潜水艦が水産高校の実習船「えひめ丸」を沈没させた。このニュースを森首相はゴルフ場で聞いたが、すぐに首相官邸には戻らず、プレーを続行した。しかもこのゴルフ場の会員権が無償譲渡されたものであることが発覚した

の政治哲学の復権と呼ばれる事態は、欧米の学界の影響もあるが、ネオ・リベリズムがその根底において理念による改革であることから生まれている。その政治哲学的考察の成果を日本政治に当てはめて、同時にその議論を再検討することが、ここでの課題の一つである。

しかし、現代政治は単なる理念の対立だけではない。その背後には、経済、社会の大きな構造変化が存在する。グローバルゼーション、情報化、ソフト化と表現されるような世界的再編が、ネオ・リベリズムの登場と席卷の背景をなすのである。言い換えると数十年単位の構造変化を受けて、現代政治が変容していつていると考えられる。

この理解には、経済学、経済史学的な視点が欠かせない。この十数年ほどの間に、日本政治の解釈に導入され、大きな成果を挙げている政治経済学的分析は、こうしたマクロな視点を提供してくれる。それをミクロな政策過程分析とつなぐこ

とが、第二の課題である。

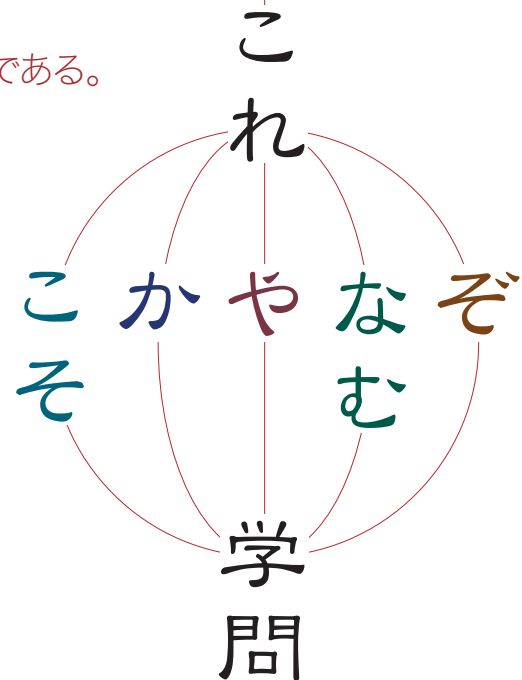
ところで、小泉政権の世論操作は、これまでの政権と較べて一段とレベル・アップした。テレビを巧みに操る手法にたけているのである。イラク人質事件や拉致問題への対処にそれは顕著に現れ、内閣支持率の上昇に貢献している。そもそも現代のポピュリズムは、テレビの報道を抜きにしては成立しない。テレビによる政治家のイメージ化（善玉・悪玉、清潔・不潔イメージ）と政治のドラマ化といった現象は、世界的現象であり、現代政治の最大の特徴の一つである。メディア研究については、マスメディア政治の先駆であるアメリカの政治学、社会学がこれまでかなりの研究蓄積をもつ。その成果を取り入れて日本政治を分析することも、さらにもう一つの課題と言えよう。

これら三つのアプローチを組み合わせて、小泉政治を比較政治学的に分析すること、それが現在の私の研究課題である。

巨大魚メコンオオナマズの 行動と生態を探る

荒井先生は、日本と東南アジアにおける水圏生物の行動生態学研究とその保護管理に資する研究をおこなっている。現在のところ、ウミガメ、メコンオオナマズ、ジュゴン、メバル、アカアマダイなどが対象である。メコン川流域にのみ生息する、世界最大の淡水魚メコンオオナマズ（タイ語でプラ・ブーク、大きな魚）は、最大体長三メートル、体重が三百キログラムにも達するが、生息数は減少して絶滅危惧種に指定され、タイでも唯一、北部のチェンコンで漁業が許可されているだけである。漁獲対象が産卵期の親魚だけであることから、メコンオオナマズの生態、特に、産卵後の親魚がどこを回遊しているのか、稚魚・幼魚はどこに生息しているのかなど、多くの謎に包まれている。タイ国水産局の要請でパイオ

1997～98年の南極観測夏隊員で、
アデリーペンギンの潜水行動のフィールドワークをおこなった。
今はタイで、世界最大の淡水魚メコンオオナマズの回遊行動を追跡中。
京大を卒業後、行政マンとして13年、
研究費の獲得や漁業調整に腕をふるい、母校へやってきた。
海洋生物の実態解明にいとむ荒井先生は、
数字にも強く、積極的で魅力的な語り口の持ち主である。



荒井修亮

大学院情報学研究科助教授に
学問観・人生観を聞く

テレメトリー（電波や超音波をもちいた生物行動遠隔測定法）を利用した解明に取り組んでいる。

農林水産省に入省

——先生は海が好きだったのでしょか、魚が好きでこの研究に入られたのでしょうか。

荒井 私は京大病院で生まれ、京都育ちです。コンピュータが普及しはじめたところで、情報系の学科に進みたかったのです。しかし京大工学部の受験は不合格で、一九七五年信州大学の情報工学科に行きました。が、やはり京大で勉強したくて、翌年、農学部を受験し、水産学科に入學しました。

二三百海里問題などで、これからは海の時代だと言われていたことも影響していたと思います。ですから、

この時点までは海も魚もあまり関係ありません。三回生の専門課程に入ると、舞鶴での実習も面白く、海の仕事の一端がわかってきました。講義もまじめに出ました。これがそのときのノートです（と、ノートを見せる）。信じられないくらい、きれいにきちんと整っています。

一九七九年、イラン革命（翌年、イラン・イラク戦争）を機にOAP EC（アラブ石油輸出国機構）が石油価格を三倍に引き上げて第二次石油ショックが起き、民間企業への就職はむずかしく、公務員になるか教員になるしか選択肢はありませんでした。

国家公務員試験に受かったので、農林水産省に入省しました。まず水産統計課（当時）に配属されたのですが、この課は組合運動が盛んで、



↑→生き物に機器を装着して行動をさぐる。1979年当時のデータロガー（上）は直径11センチ、長さ29センチ（写真・内藤靖彦）、ウミガメくらいにしか装着できなかった。1991年頃からデジタル化がすすみ、メコンオオナマズに装着されている超音波発信機（右）は直径1.6センチ、長さ6.5センチ、10グラムである。同比率で掲載



■あらい のぶあき

1980年 京都大学農学部卒業
農林水産省入省
1993年 京都大学農学部水産学科助手
1998年 京都大学大学院情報学研究科
社会情報学専攻助教授
瀬戸内海広域漁業調整委員会
委員、国立極地研究所専門
委員会委員、独立行政法人評価
委員会専門委員（農林水産大
臣委嘱）

組合運動の何たるかを学びました。日比谷公園から国会へのデモにもよく参加しました。

その後、水産庁で水産行政に従事しました。最初はおお・まぐろ漁業班でした。世界中に漁場が展開していますので、海外交渉があります。最初に外国に行ったのが、南太平洋のソロモン諸島、キリバスでした。このときは行く先々で交渉決裂でした。

水産行政の醍醐味

荒井 研究部研究課（当時）に転じ、研究行政をやりました。当時、傘下に水産研究所（水研、現在・独立行政法人水産総合研究センター）が全国に九カ所あり、総計約五百人の研究者がいました。そのマネジメントならびに各都道府県の水産試験場への補助金の配分などをしていました。ここで水研の研究者の方々と

大学の先生方と面識ができました。「この研究がいかに意義があるかについては私が説明するから、お金があればどこまでやれるのか言ってほしい」と研究者に言って、大蔵省（当時）と交渉しました。百発百中くらいで予算をとりました。

研究と行政をつなぐインターフェースというのが、一つの職制としてあってもいいのではないか、という気がしました。子どもの頃から好奇心が強いのと、高校生の頃から『日経サイエンス』『科学朝日』『自然』の三誌には毎月かならず目を通して

いましたから、科学技術の研究動向はおさえていました。大蔵省に説明するときも、水産では今はこのトレンドだ、ということが言えるわけです。

科学技術庁（当時）に出向後、神戸にある水産庁瀬戸内海漁業調整事務所に調整課長として赴任しました。漁場が競合する瀬戸内海の漁業調整です。昔から漁場を巡る流血の争いがありました。江戸幕府がなかに入ってやっていったことを、今は農林水産省が仲裁しているわけです。播磨灘でおこなわれているサワラ（春に瀬戸内海に來遊する）流し網がありますが、赴任直後、五月の連休明けに兵庫県と香川県が争いをはじめたのです。漁業者は漁業者で言い分がありますし、県は県で立場があります。

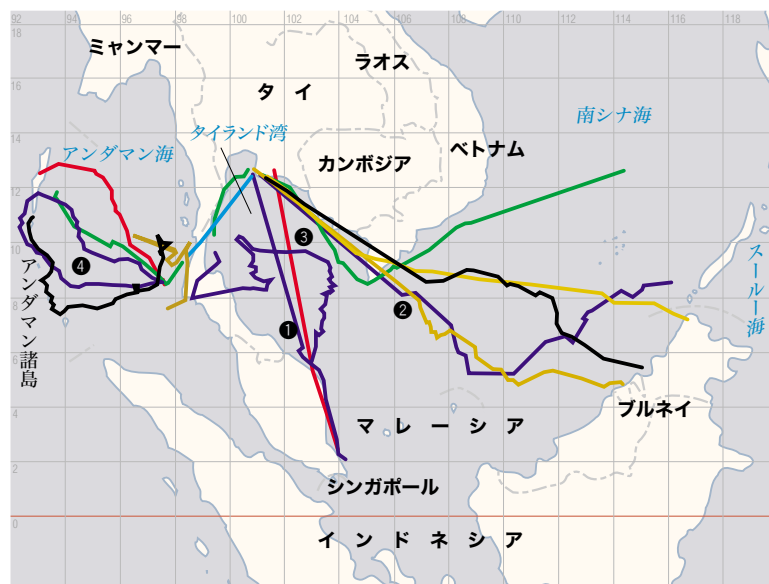
県境は地方自治法第五条で定められています。「従前の区域による」としか書いてありません。要するに海の上に県境はない、ということなんです。なぜかという点、魚は今日はここにいたけれども、明日はどこにいるのかわからない、昨年はA地点で群れていたけれども、今年はB地点で群れている。だから、県境はぼかしておいたほうがいいのです。

兵庫県が、「香川県が兵庫県のテリトリーである四番ブイまで入ってきて漁をしている」と言ったのが紛争の発端です。播磨灘の西から東に一番から五番までのブイがおかれていたのですが、香川は昔から四番の

ブイあたりまでいつていたというのです。

この調整には一年近くかかりました。漁期が近づいているので、今日決めないと面倒を見ないよ、と期限をきりながら、かつ双方が地元に戻ってから説明できるような玉虫色にするしかありません。

網を入れても潮の流れなどで、ある程度は大目に見ることが必要だということとは互いにわかっていました。そこで「三番ブイ付近」ではどうか、と提案しました。「四番と三番との間で、四番に近いところは、三番ブイ付近とは言わないね」と付言、一瞬



➡アオウミガメの回遊経路はホームページで公開中。タイ側とアンダマン海側で合計24個体が放流され、4パターンあることがわかった。タイ側では①放流後に南下する、②タイ湾沿岸を通過して南シナ海からインドネシア、スールー海へ至る、③タイ湾沿岸を東西に回遊する、アンダマン海側ではほとんどがタイ本土に回遊することなく④インド領アンダマン諸島へ回遊した

●国際共同研究SEASTAR2000（アオウミガメの回遊追跡プロジェクト）のホームページ
<http://bre.soc.i.kyoto-u.ac.jp/seastar2000/>
SEASTARは Southeast Asia Sea Turtle Associative Researchの略であるが、sea starはヒトデのことである



➡↑タイ、ウミガメの甲羅に人工衛星への発信機をとりつける。呼吸時に海上にでた際の信号を人工衛星が受信する。45日で2000キロ以上泳ぐ個体もあった。上の写真の前列左から3人目が荒井助教

の沈黙のあと、まとまりました。

はじめはウミガメ

——行政職から研究職に転じられた理由は何か。

荒井 大学生時代に坂本亘先生（京都大学名誉教授、近畿大学教授）の講義の中に「漁業測定学」がありました。魚に超音波発信機を装着して行動を追いかけるというもので、途方もない発想に驚き、メカっぽい研究が好きな私は、大きな関心を持ちました。最先端の研究から受けた衝撃はずっと忘れがたかったです。その後、縁あって坂本先生に呼ばれ

て一九九三年、三十六歳で坂本研究の助手になりました。

生物を研究している人は一般的にメカに弱いので、メカに傾斜すると、インチキをしているのではないかと見られます。生き物に機器（超音波発信機やデータロガー）を装着して、本当の行動がわかるのか、というわけです。ですから、坂本先生の研究に対して当初は、周囲に抵抗があったのも、事実です。

——なぜ、タイのメコンオオナマズなのでしょ

うか。
最初の頃（一九七九年）は、直径十一センチ×長さ二十九センチとい

う大きな機器（データロガー）で魚にはつけられないので、坂本先生が注目されたのが、ウミガメです。ウミガメを調査しなかったのではなく、ウミガメくらいしか装着できなかったのです。しかし十数年ほどすると、「ウミガメといえば京大の坂本研究室」ということになりました。

そこへ、タイ国水産局（日本の水産庁にあたる）から申し入れがきました。きっかけは、アメリカの言いがかりです。一九九六年アメリカは、TED（ウミガメ類混獲防止装置）未装着漁船で漁獲されたエビ類の輸入禁止措置を、ASEAN諸国に通

告しました。メキシコ湾での漁獲を想定したアメリカの国内法を他国に押しつけるという、一方的な話です。

当時、タイのアメリカへのエビ輸出量は国別で一位、また輸出総額は日本円でおよそ六

百億円でした。タイはTEDの普及を図ると同時に、アオウミガメの回遊生態調査を京大に求めました。回遊経路、水深、移動速度を考えれば、タイのエビトロール船ではアオウミガメは漁獲できないということが証明されればいいわけです。二〇〇一年度と二〇〇二年度に合計二十四匹のアオウミガメに記録機器を装着して放流し、三つの回遊パターンがあることがわかりました。また、エビトロール漁場とアオウミガメの生態との関連は薄く、混獲の可能性は薄いことがわかりました。

千数百キロにわたる回遊

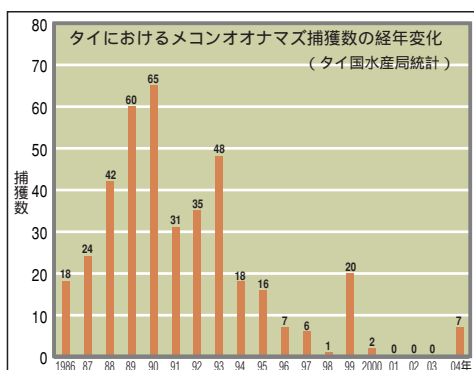
荒井 さて、メコンオオナマズの話をします。

タイは海に面している県もありますが、基本的には内陸国です。海のない県では川や池で養殖をやっています。その中でも、タイとラオスの国境を流れるメコン川が存在が大きい。千七百種類が生息しているといわれる魚類は、流域住民の貴重な動物タンパク源になっています。



↑メコンオオナマズは最大体長3メートル、体重300キロもある世界最大の淡水魚である。タイ語ではブラ・ブーク、大きな魚と呼ばれる。メコン川の水位が低くなる4～6月、産卵にあがってくるメコンオオナマズを刺し網で捕獲する。タイ側とラオス側あわせて100隻くらいの船が決まった順にでて、夜通し漁をおこなう。メコンオオナマズの肉は珍味とされ、1匹捕獲すると半分くらいの収入を手にするができる

写真・川口敏彦



↑↑メコン川は全長は4000キロとも、4500キロともいわれる。ミャンマー、ラオス、タイにまたがる黄金の三角地帯、タイ最北部のチェンコンを流れるメコン川。メコン川にのみ生息するメコンオオナマズの漁業はここでのみ、許可されている。棒グラフのように捕獲数は減ってきており、絶滅危惧種に指定されている

水産局の統計によれば、チェンコンにおけるメコンオオナマズの近年の漁獲のピークは一九九〇年で、六十五匹でした。九四年は十八匹、二〇〇〇年は二匹、〇一〜〇三年は〇、今年の七月中旬に現地へ行って聞くと〇四年は七匹とれたそうです。

生態で唯一わかってるのが、ミヤンマー、ラオス、タイの国境にまたがる黄金の三角地帯のチェンコンで、大きなメコンオオナマズが捕獲されることです。メコン川の水位が低くなる四〜六月にかけて対岸のラオス側との中間の中洲に仮設小屋ができ、産卵にあがってくるメコンオオナマズを刺し網で捕獲します。

ここからメコン川を千数百キロくだると、カンボジアにトンレサップ湖があります。この湖は、トンレサップ川を通じてメコン川とつながり、雨季には河川の逆流と天水で、乾季の三倍もの面積になる、淡水魚の宝庫です。ここにもメコンオオナマズがいると言われています。

——トンレサップ湖との関係がありそうなのですか。

荒井 ないわけではないと踏んでいます。メコンオオナマズの稚魚が、栄養分が豊富なトンレサップ湖の氾濫原で大きくなっていくことは十分に考えられることです。成長したメコンオオナマズが、果たして産卵に

あがってくるかどうかです。途中、幅九百メートルの濁流が十五メートルの高さから落下するコーンの大瀑布がありますが、大きな魚がこの滝をのぼっているとすれば、壮観だと思っています。

ウミガメは肺で呼吸するので、二十〜六十分に一回かならず水面上にあがってきます。そのときに発信機からの信号を人工衛星がキャッチします。メコンオオナマズは水面上にあがってこないで、この方法ではだめなので、養殖された幼魚に超音波発信機を埋め込んで放流しています。

これは、京大坂本研究室が琵琶湖でおこなったビワコオオナマズの調

査の応用です。船に受信機をのせて追いかける方法がありますが、大変な重労働です。私は琵琶湖を何周したことでしよう。

そこで、ナコンパノムのメコン川沿いに受信機を設置しました。超音波発信機にセットされたID番号によって、何時何分何秒に何番の魚がその受信機の近くを通ったのかがわかります。

十四放流したうち四匹は放流から一週間ほどで約六十キロ上流へ、一匹は下流へ、残りはどこへいったのかわかりません。わからないというのは、メコンオオナマズが対岸のラオスにいくと、今のところ手を出せないからです。

——メコンオオナマズは、タイ人にとって特別な意味をもっているのでしょうか。

荒井 メコンオオナマズは、まさに絶滅の危機にあるのかもしれませんが、タイ国水産局の努力によって人工採卵・受精による養殖は可能となつているため、本種が絶滅することはないと思います。メコン川での生息生態を解明し、科学的根拠に基づく保護をおこなうことは重要ですが、加えて人為的に管理できるダム湖などでメコンオオナマズを増殖し、利用するという方策も検討すべき時期にあると思います。私たちの研究が、メコンオオナマズの保護に科学的な根拠を与えとともに、タイの人たちが有用な資源として利用する一助となれば幸いだと考えています。(K)



↑→調査地のナコンパノムで2002年6月、養殖された幼魚10匹に超音波発信機を埋め込んで放流。メコン川沿いに受信機が設置され、広い範囲を移動していることがわかった





高校の卒業近く、いずれは家業の小売りの酒屋を継ぐつもりで、他に就職が決まっていた。まだ就職が決まっていなかった友人のところに、日本モンキーセンターを通じて霊長類研究所の飼育の仕事の話がきた。「友人は全然興味がないと言う。そこで私が手を挙げました。その霊長研の資料を搜したのですが、できただけで何もありません。やっと得た情報はわずかにありましたが、どうしても霊長研の飼育の仕事にひかれるものがありました。面接試験を受け、赴任したものの、建物は建設中、サルはいない。最初はモンキーセンターで研修を受けていました。」

「三世代十五人」のチンパンジーの一群を見る

第二次世界大戦後、京都大学の今西錦司、伊谷純一郎（いずれも故人）らが中心になって、サル学（霊長類学）の研究が盛りひらかれた。一九四八年からの野生ニホンザルのフィールドワークにもづく研究の蓄積によって、一九五七年に日本モンキーセンターが発足。世界でも一番多種のサルを集めた動物園・博物館であるが、その隣に

霊長類研究所は1967年に京都大学の附属施設として設立され、翌年から、愛知県犬山市で研究が始まった。

「動物が好き」で就職した熊崎さんは、生え抜きの生き字引的存在である。どちらかといえば華奢なからだだが、動物同士のイザコザの最中にもわってはいることができ、センターでかけがいのないおひとりである。

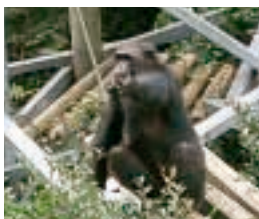
霊長類研究所は建てられた。日本の学問の多くは、中国や西洋の文物を翻訳する（受信する）ところから始まっているが、サル学の場合は日本がオリジナリな研究成果の国際的な発信の場となった。今西、伊谷の問いかけは「野生ニホンザルにも社会（文化）があるか」だった。霊長類研究所では、現在フィールド観察と実験観察を並行して研究がすすめられている。長期にわたる研究も継続している。所属の研究者は約四十名。大学院生、研修員も受け入れている。

ここでは、ニホンザルが約四百頭、アカゲザルが約二百頭など、十八種七百五十頭が暮らしている。それを教員、熊崎さんたち技術職員、非常勤職員で管理している。熊崎さんは、同僚の二人とともに「三世代十五人」のチンパンジーの一群を維持していく世話をしている。チンパンジーの寿命は五十年ほど、人類ときわめて似た知能をもち、「人類進化の隣人」といわれている。このなかには、よく知られている「アイとその息子アユム」もいる。取材中に、チンパンジーの昼食の時間がきた。熊崎さんに同行させていただき、緑の運動場とつながった「類人猿居室」の一角に入る。一人ごとのボックスがあり、食料が入っている。バナナ一本、サツマイモ一個、リンゴ半分、キャベツ半分を適当な大きさに切り、熊崎さんは居室の中に入る。母子のチンパンジーで、母がプチ子がピコ。プチは熊崎さんと親密な関係で、会話をしながら食事をしているように見える。一歳すぎのピコは「脊椎の骨が二つたりなくて、下半身が不自由」なこともあるのか、食事もしずまない。

互いに近づくことで信頼感が生まれる

熊崎さんに仕事の醍醐味について聞くと、「チンパンジーと心が通いあった」瞬間だそう。最初はウンチを投げられたり、ツバをひつかけられたりしていたのが、世話をしているうちに、距離が一センチずつ近づいてきて、あるときぴたっとくっついてくるのです。彼らは体力もあり危険なのですが、じつは、私も彼らに近づいていっているのです。同時進行で互いに近づく。攻撃されないという信頼感が積み重なって、もう安心という段階に入ります。プチは信頼しているのですが、ピコはまだ怖がついて、私の膝の上にはこないのです。これが抱っこできるようなになると、親から離せるので実験に加われるようになります。」

↓熊崎さんに餌をねだるチンパンジーのボボ。熊崎さんはバナナのシラカン（白樫）の枝を与えた



↑霊長類研究所の運動場に設置されている、高さ15メートルのトリプルタワー。飼育される動物の立場にたって、1998年に導入された

■くまざき きよのり

- 1968年 岐阜県立加茂農林高等学校畜産科卒業
- 京都大学霊長類研究所採用
- 1998年 霊長類研究所附属サル類保健飼育管理施設技術専門職員
- 1999年 霊長類研究所附属人類進化モデル研究センター技術専門職員

国際会議の 発表準備に忙殺

村上幸弘

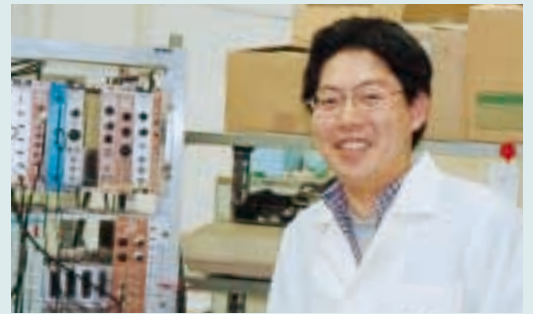
■むらかみ ゆきひろ
大学院理学研究科博士課程
大阪市生まれ

笑 顔がとびつきり明るい三十歳。既婚。大阪府泉南

郡熊取町にある京都大学原子炉実験所に毎日通い、実験三昧の生活を送っている。この実験所は、原子炉によるさまざまな実験とそれらに関連する研究を行なっており、京大ばかりではなく全国の大学や研究所の研究者のための共同利用施設である。

村上は甲南大学の理学部物理学科を卒業して、大阪大学の修士課程へ進み、そこで京大の原子炉実験所を共同利用していた。修士課程を終えていったん企業に就職したが、研究への夢絶ちがたく、京大の博士課程へ編入学した。

当時、すでに結婚していた村上は、姉さん女房に相談する。妻の答は、「やりたいことをやったら。チャレンジしないで夢を諦めて、一生そのことを後悔されても嫌だし……」というものだった。「でも、いざ会社を辞めるとなると、ぼくのほうが躊躇してしまうようなところがあっ



て、意外と度胸ないんです。その点うちのカミさんは肝が据わっています。とても感謝しています。村上の、澁刺とした笑顔を見ていると、研究の充実感が自然に伝わってくる。

現在おこなっている研究の正式名は、「鉄モリブデン金属人工格子の磁気的性質の研究」である。「研究の目的は、蒸着法で作製した多層膜の磁気的性質についてです。鉄とモリブデンに電子ビームを当て、熱で溶かし、蒸着したものをつくっていく蒸着法によって、数ナノメートル(ナノは十億分の一)単位のきれいな多層膜ができます。次に放射性原子核を用いてマイクロな領域での物性情報を得、この情報から多層膜のマクロな物性現象(磁気的性質)を解明します。なぜそういうことをするのか」と、人工的に制御した

多層膜の中で、界面効果や層間相互作用などによる電子状態の変化を通して、普通の物質にはないような新しい物性が出てくるケースがあるからだ。

現在、彼は、八月にドイツのボンで開かれる「超微細相互作用」に関する国際会議での研究発表のための準備に忙殺されている。国際会議の発表には、ポスター発表と口頭発表があるが、初めて出席する国際会議でもあり、当然ポスター発表になるだろうと思っていた。ところが、「口頭発表で」と連絡が入った。「ちょっと冷や汗タラリという感じになりましたね(笑)。たぶん、金属多層膜という研究テーマがまだ新しい分野であること、また、原子核を使ったミクロな物性研究というのは、大規模な設備も必要なので、非常に珍しいから、トピックス的な内容になるだろうと思われる口頭発表になったのだと思います。でも、発表は英語ですし、今はその準備にばかりつぎひです。十五分間発表して、質疑応答が五分間なんです。英語も得意じゃないし、どんな質問が出るか不安な面もありますね」……とは言いながら、この伸び盛りの研究者の目は興奮と希望に輝いていた。

(H)

創

部は一九九七年の冬です。TREVISとは、イタリア語で紫キャベツの意味で、ラディックキョとも呼ばれていて、サラダなどによく入っています。初代のキャプテンが料理の本を読んでいて響きがいいので、命名したそうです。現在の部員は十人、うち男性が二人の男女混成チームで、男性は片手で女性を持ち上げられることまでできるので、男性がいると随分と技に幅ができます。

私は小学生のころからダンスが好きで、大学ではきちんとダンスをやろうと思っていたのですが、京大には自分に合うダンスのサークルがなかったため、それに近いチアリーディングに入りました。やってみると、ダンスより「はまった」気がします。体操をやっていた人も幾人かいます。

ベース(地上でトップを支える人)の力もさることながら、トップ(ベースに支えられて、

体力、筋力、 そして笑顔

土山貴子

■つちやま たかこ
医学部3回生
チアリーディングサークルTREVIS
キャプテン
大阪府和泉市生まれ



されます。大会では一定の基準(同時性とか難易度とか)によって審査がおこなわれます。TREVISは、どちらがメインということはありません。

演目づくりは、選曲から始まり。各種の曲のいいところを選択して音楽の編集をします。個人個人のできる技を勘案しながら演技の構成を考え、音楽とかみあわせながらつくりあげていきます。私はトップでもベースでもやりますが、視線が集まるトップのほうが精神的負担が大きく緊張します。事故には気をつけていますが、私はスタンツ(組体操)の一番上から落ちたことがあります。顔面と肋骨を打って、救急車がくるまで意識がなく、全治二カ月でした。親は「チアは危ないスポーツだからやめなさい」といつも言っています。一見、華やかですが、危険と隣り合わせです。しかし、高度な演技をしている、絶対に笑顔でないといけません。最後のほうで相当息があがっていても、笑顔。

しかし、観客のみなさんが拍手とか歓声で楽しんでいて喜びがわいてきます。昨二〇〇三年十一月のN.F.(京大学園祭)のステージは、すごく盛り上がりしました。最終日のファイナルの最後に出演したのですが、熱気も歓声も今までのイベントの中で一番でした。

(K)

輝きは動から

右上が土山さん



演技は四、五分が限度で、十分間ほど休憩して、もう一演目という感じです。

イベントか大会かで、演技内容と雰囲気が変わります。イベントだと見栄えのするかわいいもの、大会だとむずかしい技が要求



「アーツ・見聞」
京都大学
旧農学部附属演習林
本部事務室

新たな哲学を育む場

吉

田キャンパスには国の文化財として登録されている建築物が十棟ある。その一つが北部構内の中央にある。それはバンガロー風のモダンな木造建築、旧農学部演習林本部事務室である。案内してくださったのは、大学院地球環境学堂の小林正美教授（工学博士）。

風、景観、人の交わり

「この建物は、一九二〇年創設の京都帝国大学建築学科を第一期生で卒業した大倉三郎が、京都帝国大学営繕課技師のときに設計、一九三一年に完成させたものです。非古典系の軽快な木造の洋式建築で、一九〇〇年頃ドイツやオーストリアで流行した芸術様式のユーゲントシュティール（ドイツ語で「青春様式」、アール・ヌーボー様式のドイツ語圏の呼称）を感じさせます。一九二三年に開設され

た京都帝国大学農学部も、当時のドイツ農学を建学の精神にして発足したと聞いています。」

「高温多湿の日本の風土には高床の伝統を生かし、靴と椅子の西欧式のエデュシシステムには、屋根構造にボルト締めトラス小屋組みを採用し、天井の高い梁間の大きな空間を確保しています。そのことによって室内でも風を感じ、ベランダも風が良く通る設計になっています。門からポーチに向って入っていく角度は四五度（北西）、右手に比叡山を見ます。まわりの景色を取り入れながら、まわりと共存する建物に設計されています。京都大学を庭、まわりの山並みをランドスケープにしたデザインといつていいでしょう。また、バロック庭園を模した本部試験地の側から入ると、導線や軸線が直交しないように、建物の軸をふってゆるやかなアプローチでまとめ、



➡1931（昭和6）年建築の旧本部署務室。木造建築であるが、当時のヨーロッパの考え方を巧みにとりいれ、周囲の景観とも調和している。京都帝国大学営繕課の大倉三郎の設計

◀ゆったりとした感のある、本部試験地側からの入口

真つ直ぐではお互いに対立するまわりを、なじませるようにつないでおり、肩に力を入れずに通れます」。

「京大のシンボルである時計台は、正門から入ると真正面に聳えるように対峙します。前には楠がありますが、大学での中心性や権威を象徴するために、シンメトリーに、まわりの力を集約するように設計しています。いわば

「言うことを聞きなさい!」、とでもいう理念でしょうか。これに対してこの建物からは、自由を尊ぶアカデミックな人たちが、気持ちよく研究でき、学生と一緒に学ぶという理念が感じられます。当時のドイツは、一部の支配階級の建築から人びとの建築へとという、パウハウスの造形教育が勃興した時期でもあります。こうした世界の潮流が、クラシックな様式から新しい様式に移る過渡的に表出した意匠によつても示されています」。

「この建物に感じる、のどかさや風通しの良さを大事にしていきたいと思えます。それは、外に開かれた国際性の考え方が基調にあるからこそ表現されているものだと思います。ですから、水と木を基調とした京大のこれからの北部再開発の要に、まさにふさわしい建築なのです」。

森と里と海のつながり

つぎに、フィールド科学教育研究センターの竹内典之教授（農学博士）

に演習林の話聞いた。竹内教授が演習林教官になった一九七一年当時は、「演習林には財産林としての性格が強く残っており、研究とともに大規模な事業もやっていましたから、研究室、事務室、会議室、さらに業務事務室として使われていました。演習林は創設期には大学資金確保（大学財政独立）のために取得されました」。

時系列でおつていくと、一八九七年京都帝国大学開設、一九〇九年に台湾総督府から台湾演習林が移管され、一九一二年に朝鮮演習林、一九一五年に樺太演習林、一九二二年に芦生演習林（京都府）が設置され、一九二三年、農学部創設とともに農学部附属演習林となった。「大学の資金源なので演習林本部は時計台の建物内にありましたが、収入をあげていたので、北部構内に本部署務室の建物がつくられました」。第二次世界大戦の敗戦で「外地演習林」は消滅したが、北海道演習林などが設置された。「採用になつてすぐ、この事務室に挨拶にきました。次の日に北海道に赴任したので、この本部署務室には年に二、三度くるくらいでした。一九七〇年代なかばまでは大々的に演習林の伐採をしていました。ですから、事業事務は大量にあつたわけです。演習林の野球チームもありました」。その後、演習林は伐採面積の縮小、合理化の対象となり、一九七九年に事務

室は農学部総合館に移転した。

竹内教授の研究テーマは林業工学（林道計画）から森林資源管理学（人工林の管理）へとシフトしてきた。「もともと林業は、都市の文化と関連したものでした。ところが、日清・日露戦争あたりから林業は原材料供給部門におしこめられてしまったのです。江戸末期に人工林は五十万ヘクタールほど。今は森林面積の四割、一千万ヘクタールが人工林です。第二次世界大戦時の乱伐で土砂災害が次々と発生し、国をあげての緑化がすすめられました。高度経済成長時には生産力増強をめざして拡大造林がおこなわれましたが、植えられたのは換金対象の杉、檜ばかりで、モノカルチャーな森林になっていきます」。

今、竹内教授やフィールド科学教育センターが強調しているのが「森と里と海のつながり」である。環境保全を三域の連環のなかで考えようとするものである。

演習林とこの建物は二十世紀における歴史的役割を終えた。が、小林教授も竹内教授も二十一世紀における新しい哲学の再生の場として位置づけており、今後の展開が注目される。（K）



➡心地よい風が通るベランダの天井の意匠には、モダニズムの息吹が感じられる。ベランダの柱はギリシャや唐招提寺のような円柱ではなく、角柱で力強さを表現し、さらに鉄で補強している



ダンテ研究への多大な貢献

赤井規晃

(京都大学附属図書館)



◀ダンテ『神曲』1555年 Gabriel Giolito版。Lodovico Dolceによる編集で、初めてLa divina comediaの題名が使われた



↑ダンテ『神曲』最初の小型刊本。1502年Aldus Manutius版。最終葉裏にAldusのプリンターズ・マーク「海豚と錨」があるので、残念ながら初版印刷ではない

◀柳宗悦作蔵書票。下に、Jukichi Ogaとある

附属図書館が所蔵する文庫のひとつに旭江文庫と呼ばれるダンテ文献のコレクションがある。

日本における民芸運動の父・柳

宗悦デザインの蔵書票(蔵書票)

でも有名なこの文庫は、市井のダン

テ学者大賀壽吉(一八六五〜一

九三七)がその生涯をかけて、な

みはずれた情熱と努力で収集した

ものである。没後間もない昭和十

四(一九三九)年七月に遺族の手

により寄贈された二千三百六十一

冊と、すでに同年三月に寄託され

ていた三百七十七冊のあわせて二

千七百冊あまりという規模は、ダ

ンテ文献のコレクションとしては国

内最大のものである。なお、文庫の名は、大賀が故郷岡山の旭川にちなんで「旭江」を号としたことに由来する。

京大図書館に寄贈せんか

十六〜二十世紀にわたるダンテの著作刊本約六百点、研究書約千三百点のほか、英米独伊のダンテ学会誌、新聞・雑誌の断簡をも含んだ、質・量ともに豊かな旭江文庫は、原典、翻訳はもとより、注釈、伝記、時代史、評論、書誌、辞典に至るまで、幅広く体系的に集めようというその収集方針において、とくに高い評価を得ている。

生前の大賀が、将来的に蔵書を京都大学に納め、後学に資せんと意図していたことは、『神曲』の訳者として著名な山川丙三郎に送った大正後期の書簡から明らかである。

「所蔵のダンテ図書の少くとも大部分を京大図書館へ寄贈せんか」。「何日かは誰か之を利用することも有之可申存じ将来を楽しみにいたし居候」。

大賀がそう考えたのは、まだ京都大学文学部にイタリア文学講座(昭和十五年十二月開設)もなく、ダンテに関する文献も乏しくて、まともな研究ができるような状況ではないと、当時京都大学の副手でダンテの研究をしていた黒田正利から聞かされていたから

である。

大賀の蔵書のダンテ学への貢献の一例として、山川訳『神曲』の成立をあげることができる。大賀が山川に宛てた書簡(東北学院大学図書館蔵)は二百十通が遺されているが、それらを読むと、大賀の蔵書がいかに重要な役割を果たしたかがわかる。大賀は、新刊や古書を手に入れるたびにその本の長所や短所を紹介し、欧米のダンテ研究の動向について最新の情報を伝え、校本の異同や誤植の指摘にいたるまで、翻訳上有用と思われる膨大な蔵書を駆使し助言を惜しまなかった。大賀の蔵書がなければ、山川も『神曲』の訳者として名を残さなかつたのではないかと思われるほどである。

ダンテにいたる道

大賀壽吉は慶応元(一八六五)年、岡山に生まれた。明治十(一八七七)年頃に岡山で伝道がはじまったばかりのキリスト教を知り、明治十三(一八八〇)年には岡山基督教会の設立にあわせて新島襄より洗礼を受けた。すでに英語をよくしたらしく、その年の『七一雑報』(わが国最初のキリスト教系週刊紙)には五編の翻訳記事がある。

明治十四(一八八二)年九月、同志社英学校余課へ進んだ。金森通倫をはじめ、岡山でのキリスト

編集後記

国立大学法人京都大学の発足から半年。あらたな「京大像」の模索が始まりました。通巻6号は、法人発刊の初号になります。

今回の編集過程で、はからずも浮上してきたのは、「開く」という言葉でした。開かれた大学とはどのような状態を言うのでしょうか。もちろん、一冊の誌面では論じ尽くせません。ただ、巻頭鼎談は、今後つづくはずの議論の、いわば口切りの位置にありながら、それ以上の意味をもつでしょう。じつは、本学と京都府と稲盛財団が核になって組織した年次世界フォーラム「京都文化会議——地球化時代のこころを求めて」が、昨年11月にはじまり、そのレセプションが金剛能楽堂で催された縁があります。宗家父子による『石橋』の獅子、すなわち文殊菩薩の愛獣、の舞いがあざやかでした。京都という、武張らない文化が多重に織りなす町とともにある金剛能のしなやかさは、本学が「開かれた大学」への道を探るにあたり、示唆を与えそうです。

「開く」といえば、人だけでなく環境や自然に開かれた心をフィールドの現場に立って自ら鍛えるのも、本学の習いといえます。旧演習林本部事務室の建築も法人化とともに輝きを増しそうです。また、実験室からの報告にたびたび登場している動物や草木もあらたな光を帯びますように。「科学の進歩」や「人類の利益」といった人間中心の目標にとらわれがちな研究者の心を「開くこと」につながる実験であってほしいものです。そのためにも、専門家だけに偏らない「開かれた」議論の深まりが待たれます。

2004年9月
広報委員会国内向け広報誌編集専門部会

京都大学広報誌 紅萌 — 第6号

2004(平成16)年9月25日発行

編集・京都大学広報委員会
国内向け広報誌編集専門部会

編集協力・都市出版株式会社(木村滋)

発行・京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2071
FAX 075-753-2094
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>
E-mail kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

印刷・凸版印刷株式会社

©2004京都大学(本誌記事の無断転載・放送を禁じます)



旭江文庫の『神曲』刊本の
ならぶ書架。右ページに掲
載した書籍は貴重書とし
て、別に管理されている

メリカン・ボ
ードの宣教師
A・L・ハウ
の有力な協力
者となるな
ど、教会の活
動に熱心に取

在野の学者

今ではあまり言及されることもないが、大賀壽吉は明治末期から昭和初期にかけて最もよく知られたダンテ研究者の一人であった。『開

拓者』『新人』といった雑誌を中心に、三十編を超えるダンテ論を発表し、在野の学者ながら同志社大学や早稲田大学で講演も行なった。昭和四(一九二九)年には私家版の『A Dante Bibliography in Japan』を編纂、翌年には増補改訂を施し、ダンテの故郷フィレンツェで上梓している。晩年は、W・W・ヴァーノンの『神曲』注釈書の翻訳にも取り組んでいたというが、実現せずに終わったのが残念である。

また、ダンテの芸術を正しく理解するには同時代の諸芸諸学に通じていなければならないとして、ダンテとその時代にかかわる欧米の研究書の紹介につとめた。

その後明治二十年代には、神戸の貿易会社で働くかたわら、神戸教会の役員を務め、得意の英語を生かしては頌栄幼稚園を開いたアメリカン・ボ

は熱心なキリスト教徒であった。ダンテ研究者として活躍したのは、この大阪時代に属し、役員、理事としてその運営にあたった。生涯を通じて、大賀

に、当時最も流通していたH・F・ケアリー訳やH・W・ロングフェロー訳を「最も原文批評の上からは二者の大におくれ居る事はいふ迄もない」と評し、原文にあたる

文章は、「昭和年代の初めから、私の心の片隅にあるダンテの聖甕に、いつまでも消えぬ灯を点じ続けたのは大賀翁である」と書いたが、六十九歳の寿岳をして「神曲」翻訳にふみきさせたのも、若い頃に出会ったダンテの偉大さについて熱く語る大賀その人と、「ダンテ文献のぎつしり収まっている重々しい感じの書齋」の記憶にはかならない。

教伝道に同志社関係者が深くかわつていた影響と思われる。原田助、奥亀太郎らと机を並べたが、卒業はせず、明治十七(一八八四)年までに同志社を去っている。折しも明治十六(一八八三)年十二月の徴兵令改正で徴兵猶予の特典がはずされた同志社では多数の退学者を出しているの、あるいは彼もその中の一人であったかと推測される。

り組んだ。明治二十七(一八九四)年、洋菓の単独輸入を始めようとした武田長兵衛商店(現・武田薬品工業株式会社)から輸入事務を嘱託された。それが機縁となり、まもなく同商店に迎えられ、明治三十六(一九〇三)年に大阪へ移った。以後、亡くなるまでの間、武田に勤め、最後期は顧問のような役職についていたという。ダンテ研究者として活躍したのは、この大阪時代である。また、大阪では浪花教会に属し、役員、理事としてその運営にあたった。生涯を通じて、大賀

イタリア語ができるものも少なく、英訳を介した間接的なダンテの受容の仕方が一般的だった時代に、当時最も流通していたH・F・ケアリー訳やH・W・ロングフェロー訳を「最も原文批評の上からは二者の大におくれ居る事はいふ迄もない」と評し、原文にあたる

文章は、「昭和年代の初めから、私の心の片隅にあるダンテの聖甕に、いつまでも消えぬ灯を点じ続けたのは大賀翁である」と書いたが、六十九歳の寿岳をして「神曲」翻訳にふみきさせたのも、若い頃に出会ったダンテの偉大さについて熱く語る大賀その人と、「ダンテ文献のぎつしり収まっている重々しい感じの書齋」の記憶にはかならない。

このように、大賀の蔵書は、山川や寿岳をはじめとして日本のダンテ研究に多大な貢献をなしてきた。京都大学附属図書館に収められてからも、今も内外の研究者に親しまれ、ダンテ研究の深化の一端を担っている。

- *1 大賀壽吉氏の書簡(5)、『イタリア学会誌』第十五号、一九六六
- *2 大賀壽吉氏の書簡(2)、『イタリア学会誌』第七号、一九五八
- *3 大賀を研究せんとする人々へ『新人』第八号、一九一六
- *4 寿岳文庫『神曲 地獄篇』集英社、一九七四

■ あかい のりあき	
1992年	大阪外国語大学外国語学部卒業
1996年	大阪外国語大学大学院修士課程修了
1997年	京都大学附属図書館情報管理課
2001年	総務部総務課
2003年	附属図書館情報管理課



国立大学法人京都大学を世界に向けてPR

4月1日、国立大学法人化に合わせ、海外での知名度を上げ、本学に関心を持つ知識人との国際交流がさらに進展することを期待して、国際英字新聞『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』紙に「We're Turning Higher Education On Its Ear（我々は、高等教育を一新します）」との京都大学広告を掲載しました。

広告内容の概要は、1897年に創設された京都大学は4月1日に新たに国立大学法人になり、これまでより大きな自治を獲得すること、世界文化遺産都市である京都にあること、大学の規模やノーベル賞受賞者を輩出してきた実績を紹介して、世界の政治や経済、高等教育など各方面の知識人に「京都大学の今を体験してください」と語りかける内容となっています。

紙面は、「黄金の国ジパング」をイメージした古文書風の用紙に英文を縦書きにするという意表をつくスタイルに、附属図書館に所蔵する今昔物語集から取ってきた字体で「京都大学」という文字を置き、五山の送り火「大」の文字が背景に浮かびあがる時計台の写真を配置しています。



京都大学「未来フォーラム」を開催

百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、各界で活躍する卒業生を招いて講演と意見交換を行う「京都大学未来フォーラム」を開催しています。

大学と社会との協力・連携を一層深めるため、学生や教職員をはじめ広く市民を対象に、企業や官庁、国際機関、NGO、大学・研究機関、マスメディア、文化・芸術などさまざまな分野から「OB」「OG」を迎えるよう企画しています。

第1回は弁護士・環境NGO／NPO「気候ネットワーク」代表の浅岡美恵氏、第2回はジャーナリストの鳥越俊太郎氏（写真）、第3回は弁護士・さわやか福祉財団理事長の堀田力氏、第4回は叡山学院院長・比叡山泰門庵住職の堀澤祖門氏でした。ほぼ毎月開催することとしています。

なお、百周年時計台記念館企画として、「Clock Towerコンサート」「絵画展」「写真展」を開催するなど、百周年時計台記念館を中心に、社会に開かれた大学となることを目指しています。

京都大学百周年時計台記念館ホームページアドレス
<http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/11-top.htm>

平成16年度「21世紀COEプログラム」の採択結果

世界のトップレベルの大学として、教育及び研究の水準の向上や、世界をリードする創造的人材の育成をしていくためには、競争的環境を適切に醸成し、大学間の知的な刺激がより活発に保たれることが重要です。

日本の大学を世界最高水準の研究拠点に育てようと、文部科学省が平成14年度から始めた資金の重点配分事業で、これまで5分野ずつの公募であったのが、今回は「革新的な学術分野」に限定され、本学からは1件が採択されました。

平成14年度11件、平成15年度11件と合わせて23件の拠点を有し、全学を挙げて拠点形成計画（5年間）を推進していきます。

※COE（Center of Excellence）は、「卓越した拠点」の意
本学の21世紀COEプログラムのホームページアドレス
<http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/02-top.htm>

平成16年度「21世紀COEプログラム」採択一覧

分野	申請部署	プログラム名称	拠点リーダー
革新的な学術分野	農学研究科 フィールド科学教育研究センター	昆虫科学が拓く未来型 食料環境学の創生	（農学研究科） 藤崎憲治

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」の採択結果

わが国では、個性輝く大学づくり、国際競争力の強化、教養教育の充実等が求められる中、とくに大学における教育の質の充実や世界で活躍し得る人材の養成が重要な課題となっております。各大学における教育の改善に資する種々の取組みのうち、特色ある優れたものを選定、公表することにより、わが国高等教育の活性化を促進させることを目的とするものとして、文部科学省により、平成15年度から「特色ある大学教育支援プログラム」が実施されました。

平成15年度1件に引き続き、平成16年度も「主として教育方法の工夫改善に関するテーマ」で1件採択されました。

この取組みは、京都大学の教育理念である「自由の学風」のもとで、従来から、全学、部局、教員レベルでさまざまな相互プログラムを行ってきたものを、さらに発展させ、自主的な相互研修型FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動を全学レベルで組織化しようとするものです。

特色ある大学教育支援プログラムのホームページアドレス
<http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/03-top.htm>

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択一覧

応募テーマ	取組名称	申請単位	申請担当者
主として教育方法の工夫改善に関するテーマ	相互研修型FDの組織化による教育改善	大学全体	高等教育研究開発推進センター 田中每実



京都大学広報誌

紅萌 第6号

2004（平成16）年9月25日発行
発行●京都大学総務部広報課